無償の愛

飯塚久美子

えりこは、都営住宅の二階の窓から、やっと咲き始めた桜を見ていた。好きという気持ちを優先して彼との結婚を決めたが、広い庭にある二本の桜を毎年楽しみにしていた実家での暮らしぶりが、ふと頭をかすめる。

母が作る朝食のトーストを頬張りながら眺めた桜はいつも明るい気分にしてくれた。しかし小さな公園にひっそりと咲いて桜を見てると、父がいつも繰り返す言葉が蘇った。「えり子、結婚生活は経済的なことで成り立ってるんだぞ。あんなに恵まれた人を選ばないなんて必ず後悔する」

えりこは自分の選択に悔いはないと思うようにしていたが、桜の季節になると何故か心が揺れた。

えりこは春のひざしがまぶしい日、二十代半ばで親の反対する結婚をした。えりこには、一流企業のカーデザイナーで海外にコンドミニアムと都内にローンなしの戸建てを持っている相手と婚約の話も出ていたが、その人からのプロポーズを断り、給料も安く、条件の悪い結婚相手を選んだ。そこには純粋な気持ちしかなかった。

えりこが好きな人と結婚したいと思ったのは理由があった。今から五年前の爽やかな秋晴れの日、一橋の文化祭で大学のＯＢで美術部だった彼と知り合った。えりこもファッションデザイン画を描いたり油絵を描いたりするので話は弾んだ。五ヶ国語を喋れて短歌や日本画もかく多彩な彼だった。商社に勤めていた彼は独立した。

台北に出張に行くといい「えりこも一緒に行かないか？」誘われたが、美術学校の課題があるから行かれないと断ったのである。彼は台北に行って行方不明になってしまった。

生まれて初めての恋……えりこは絶望した。一緒に行けばいいと何度後悔しただろう。だからえりこは結婚するなら好きという気持ちを優先して選びたいと思ったのである。

新婚生活はお金がなくても、愛し愛されてるという充実感があったので幸せを感じていた。子供が生まれてえりこはこんなに愛しい者が、存在することを知り喜びでいっぱいだった。彼は国家試験を目指していた。えりこの実家が税理士事務所をしていて、そこに勤務していて税理士をめざしていたのであった。その国家試験がなかなか難しいものだったので気持ちが鬱積したらしく、ある日彼はえりこにひどい暴力を振るった。う

つ伏せにして腰を足で押さえながら手の指を曲げて行くという悲惨な暴力だった。この時にえりこは指から腕の腱を傷めてしまい、また精神的ショックが大きく線維筋痛症になってしまった。この病気は怪我とか精神的ショックで発病する事もあるらしい。

純粋な気持ちで選んだ結婚。婚約が決まりかけた相手と結婚すれば豊かな経済力のある結婚生活を送ることが約束されていたのを振り切って選んだのに、夫からのひどい暴力は心の傷となった。七、八分ぐらいの歩行で足が痛み、腕痛のため家事ができない生活となってしまう。健康な体から落差のある体になってしまった。

育児も大変だった。子供を抱っこするというのは腰と腕を使うので、我慢の限界が来る

と、子供に歩いてと言わなければいけなくなる。初めのうちは大泣きしていた。月日が経つと「m子ちゃん抱っこしてあげる」と言うと「いい」と首を横に振るのだった。悲しかった。子供はろくに話すことができない年齢でも、何となく母親の体の異常に気がついていて、抱っこができないのだろうということを感じとったのだろう。情けない母親で申し訳なかった。

えりこの母親はお嬢さん育ちで挫折のない人生を歩んできたので、えりこが障害者的な病となってしまったことを受け入れることができなかった。幼少時代、病気の妹には冷たくして健康なえりこを可愛がった母親だったが、えりこが病気となってからは 調味料などが持てないと「何でこんなものも持つことができないの？　猫の手の方がマシ！」と言って暴言を吐くようになった。ある時、夫がイライラして握りこぶしで、えりこの首筋を何度もグリグリとおさえつけ、えりこは頸椎が変形してしまった。 これ以上夫と暮らすのは体に危機を感じて、母親に実家においてくれるよう懇願しても、母親は「こんなこともできないの？　役立たずの疫病神、旦那の元に帰りなさいよ！」と言って彼女を追い出すのだった。暴言のストレスから、帰り途中に過敏性大腸炎のお腹が痛くなり、駅のホームで倒れるということも何度も経験した。父親が母親に対し、「えりこは病気なだけで、イライラしてあたってくるということもないのだし、なんでそんなにお前はつめたいんだ」というが母親は聞く耳をもたなかった。

母親の暴言が夢に出てきてうなされることがよくあった。ＰＴＳＤ「心理的外傷ストレス」になっていたのだった。母親の暴言で泣きながら実家を出るがお腹が痛くて倒れ、そのたびに救急車で運ばれるのだったが、数時間点滴を受けて、看護婦が実家の母に電話して迎えに来るように頼んでも母親は迎えに来ることはなかった。看護婦から「本当に実のお母さんなんですか?」ときかれることがあった。三ヶ月ぐらい入院した時も母

親が見舞いに来ることはなく主治医の先生から病気についての説明をすると言っても当日ドタキャンをし四回目、やっと顔を出したのだったが「なんで私をこんなところに呼び出すのよ。本当は来たくなかったのよ！」ときつくあたる。

えりこが「担当医の先生が四回もドタキャンするなんて、ありえないって言ってたわ」と言うと母親は「そんなことを言うドクターなら、会わないで帰るから！」と言って帰ってしまった。

さすがにこれを見たら同室の入院してる友人達が「本当のお母さんなの？　あなたが知らないだけじゃないの？？　実の母親だったらこんなことは言わないはずよ」と言って不思議がっていた。そんなある日、また夫に暴力を振るわれ母親に暴言を吐かれ喫茶店に逃げ込み、半べそをかきながら湿布を貼っていた時に、隣に座っている男性が声を掛けてきた。

「どうしたんですか？　そんなに湿布を貼られて何かの病気なのですか？」

「理解されにくい難病を患っているのです」

すると彼は「貴女の前に座って良いですか？」と言ってきた。

えりこは人当たりの良さそうな印象を受けたので「どうぞ」と快く承諾した。

それから二人は三十分くらい、たわいもない会話をした。その後、彼が自己紹介をして来た。

彼はバツイチで、仕事は予備校の問題集を作っている会社を経営しており、彼自身は数学を担当しているそうだ。

今度はえりこの自己紹介……彼に興味を覚えたえりこは、瞬間、彼に嫌われたくないと思い一つ嘘をついた。

私はバツイチです。前の夫に暴力を振るわれ難病になってしまったと……。

すると彼は、貴女からの連絡を待ってますと、えりこにメモを渡した。

そこには彼の連絡先の電話番号が書かれてあった。

その嘘も、半月も立たないうちに彼にバレることになってしまった。勘が良くて頭がキレる彼は「旦那の匂いがした。でも例え人妻で、難病を持っていても僕は今の君が好きだ」と言って手を握りしめてくれた。彼はえりこの病気を治すために友達の医者に、何か良い方法がないかと聞いてみたり、病気に関する本を買ってきてくれた。

中国の医者で都内に名医がいることを知った彼は、えりこにすすめてくれた。東京郊外から調布までしか痛みで座っていることができないと言うと「君が調布まで電車で来て、そこから僕が送迎するよ。君が元気に通えるようになるまで。君が元気になるためには僕はどんなことでもするから」と。強く抱きしめることもできない、結婚するかど

うかさえわからない付き合いでも、彼は見返りを期待しなかった。えりこは生まれて初めて父親以外の人間からの無償の愛を感じるのだった。

彼は、「えりこが難病になって不幸な結婚生活をしていたからこそ、俺が声をかけたらついてきてくれた。真面目な女だから幸せな結婚生活をしていたら声をかけても、のってくれなかったと思う。辛い状況はかわいそうだと思うけど、君と知り合えたことは幸運なことなんだ。えりこに出会えたから今年はとても良い年だったよ」と照れながら顔を赤らめていう彼がいた。

「たとえ明日音信不通になろうと、プラトニックで真剣に愛した女がいたことを俺が六十歳ぐらいになっときに、振り返ることがあるかもしれない」と言って手を握る彼。暖かいふわっとしたものが感じられ痛みが楽になってくのが感じられた。この病気は暖かい愛情が痛みを和らげることもあるらしい。

中国の医者の治療や彼の深い愛情のおかげで、えりこは電車で往復し帰りにデパートにショッピングに行ったりコンサートに行けるまで回復した。

でも相変わらず夫の暴力や母親の暴言が続いていたので、彼は「子供を連れて俺のところに来てくれ。友人の医者に相談したら線維筋痛症は悪い環境では完治の方向にはいかない、と言われたので決心が着いたんだ」と、プロポーズをしてくれた。大好きな彼とこれから人生を歩んできたい。でも家の掃除・洗濯・料理、夫婦生活も満足にできない自分にとって、自信のないことだった。もし、彼に好きな人ができて、捨てられたらどうしよう……精神的ショックで筋痛症がもっと悪化してしまう……と考えてしまい、プロポーズを断る決意をした。

お互い好きな気持ちはあるのに別れてしまわなければならない。最後に別れる時に彼が作り、えりこに送った短歌は「来たりしぞ、尚もいくらし我が人の、明日の夢をぞ、我もまた見る」お互いに涙を浮かべての別れだった。

彼と別れてからは、彼がかけてくれた温かい言葉を思い出しては涙ぐむということがよくあった。母親である自分に夫の他に好きな人ができたと言うことは、子供に対して申し訳ないという気持ちで罪悪感があった。しかし、「私の選択は、よかったんだろうか？本当は大好きな彼の元に飛び込んでもよかったのではないか」という思いが時々押し寄せてきた。

そういう思いを忘れたくて、何かに集中して気を紛らわせる為、中国語教室に通って懸命に勉強に励んだ。そこでできた友人と共に食事に出かけたりして気持ちを前向きな方向に持っていくよう努力していった。

夫はえりこに他に好きな人ができたということを何となく分かったようで「もう二度と暴力は振るわないから」と言って、好きな彼と別れてから暴力は二度となかった。

それから三年後、父が脳溢血で倒れることになってしまった。と同時に肝臓がんも発見されて「余命半年です」と医者に聞かされ、えりこの心は動揺した。

小さい頃から、母親にハグをされたり抱きしめられたりした記憶はないが父親にはハグをされたり温かい愛情をもらってきたから、その愛情を失うということになるという恐怖に怯えたのだ。

父が「俺が死んで一番泣くのはえりこだー」と男泣きをしてる姿を見ると、とてもつらかった。税理士としてバリバリ会計事務所をやっていたのに、半身不随になって弱気になっている父を見るのが辛くお見舞いに行きたいのだが、行くと涙が出てくるので思うようには行けなかった。

そして半年後父は旅立ったのである。亡くなった知らせを聞いてから駆けつけたが信じられず何度も「お父さん、目を覚ましてよ！」と体を揺さぶった。すると妹が意味不明のことを言い出し「お姉ちゃんの旦那は税理士の免許持ってないから、お父さんが死んだから無職になっちゃうもんね。それで悲しいんでしょうね？」と。何を言ってるのかと、心外したが妹の気持ちはスーパードライなのでそういう言葉が出てくるのだと思った。

父がなくなったら母の態度が変わるかと思っていた。それは裏切られ、線維筋痛症の激痛の時に蹲って声が出ない時があるが「そこでうずくまってられると邪魔なのよ」と、相変わらず暴言を吐く様子だった。子供が「ママは動けないんだから、邪魔なんて言ったらかわいそうだよ」と言っても聞く耳を持たなかった。

風邪をひいて熱が出ると筋痛症の痛みも悪化するが、消炎沈痛剤を持ち合わせていなかったので母に「熱を下げる薬、痛みどめでいいからちょうだい」とお願いしたところ消炎鎮痛剤をくれなかった。母は頭痛持ちのため痛み止めを常に用意してあるが自分の分がなくなるから駄目だというわけである。

「お母さんは歩いてに行けるでしょう？　今は熱が出て外出できないんだからお願いだからちょうだいよ」と言っても聞く耳を持たなかった。この時えりこは本当に母の実の子であるかどうかを疑ったのである。病院の看護婦たちが言うように「本当のお母さんではないんでないですか？」という問いかけが気になったので、熱が引くと戸籍謄本を取りに市役所にでかけた。でもやはり実子であるという真実だった。だったら「なぜあんなに冷たくできるのだろ？」という疑問が彼女の心には常にあった。

子供が中学に行くことになってお弁当が必要になった時に、病気の為えりこが作ることができなかったので母が私たちの家に住むことになった。えりこは暴言を言われて気持ちが傷つくので母と住むことはできず、えりこと主人が母が住んでいた家に住むことになった。子供を残してチェンジしたということである。

この頃から夫がキャバクラ通いをするようになった。

ある時夫のポケットからキャバクラの女の子の名刺が入っていた。そこには「税理士の免許が取れないからって泣かないでね。今度一緒にどっか行こう、エミより。」と言うメッセージが書かれていた。

私には見せない涙もキャバクラの女の子には見せていたのだった。やきもちを焼くという気分ではなかった。もう税理士の免許を取ることはあきらめてしまい、今は父の後輩の先生から税理士免許を貸してもらっているという状態だが、いずれ先生も辞めた時妻子を路頭に迷わせるということが彼にとっては不安でたまらないのだろう。

えりこも人生の生き方が下手な人間だったが、彼はさらに生き方が下手なのだろうと思った。

平成十三年の冬に、母親の不注意からえりこは股関節の靭帯を損傷してしまった。損傷した痛みはかなりきついものだったがこれがきっかけとなり筋痛症が悪化してしまうのである。

歩行もほとんどできず、後ろ太ももの痛みによって座っていられず、寝たきり状態に近く、腕通も悪化し食事介助を必要とする状態になってしまった。線維筋痛症は怪我が原因で発症したり悪化したりするものらしい。

と同時に靭帯損傷した近くに、骨腫瘍があると言われてとても驚いてしまった。

しかも一人だけではなく三人の医師にそう診断され、不安は募り、靭帯損傷の近くにある、腫瘍の疑いのある部分を生検しなければいけないということだった。

夫のキャバクラ通いは前よりも激しくなり、えりこは寝たきりの状態で不安な日々を過ごすことになる。

近所の人が、生検をしないでも済むペット検査というのがあり、保険適応外だが「詳しいのが分かるみたいよ」と教えてくれたので、がんセンターでペット検査を受けることになった。結果は靭帯損傷した時に血腫ができて、その血の塊を腫瘍と間違えていたらしいのだ。すごく不安な気持ちは解消されたが、その時から夫の態度が急変した。

「俺をこんなに心配させて苦しめやがって！！　お前のことはもう知らない。一人で生きていけ、クタバってしまえ。死ね！」という暴言を吐くようになった。

寝たきりに近い状態で食事介助や着替え介助で「ズボン脱がしますよー」とか食事介助をする時に「口をあーんとあけて」と言われるとそこまで悪くなった自分が情けないため生きるのに絶望してた。そのうえ家族の支えが欲しいのに反対に暴言を吐かれてしまうなんて、とてもつらかった。体重も三十八キロまでやせてしまい、悲壮感のある印象になってしまった。

重症になっても母親からは優しくしてもらえなかった。「不細工な顔になったね～重症になって」という言葉しかもらえなかった。

入院をするとえりこがその部屋で一番重症なのに「お母ちゃんの苦しみは俺の苦しみやからな」と言って一晩中病気の妻の足を揉んでいる旦那さんや、「頑張るんだよ。ママがついてる」と言って手を握る母親たちを目にすると自分がとてつもなく惨めでしょうがなかった。同じ病室だった年配の方が「あんたが、この部屋で食事介助までしてもらって一番重症なのに旦那はこないし、母親が来ても『あんたの顔見るとむかつくんだよね』、なんて言うし、可哀そうな身の上だね」と。えりこはただ、家族に手を握って温かい言葉をかけてもらう、それだけを望んでいたのにそのかすかな希望さえも叶わなかった。えりこが思うことはただ一つ。重症の絶望する体になって家族の支えもないのなら、死んでしまいたいということだけだった。

そして二年後に母はくも膜下出血で亡くなってしまった。

娘は妹の家で世話になり、主人はえりこの実家と会計事務所があるところで暮らし、えりこは一人で親子三人でいた家に住むことになって、ヘルパーさんが一日五時間ぐらい入ってくれていた。ヘルパーさんの前では涙が出ないが、夜になると一人で誰にも見せない涙を流していた。

寂しさから親戚の医者のお母さんに電話をすると「かずこさんが亡くなったんだからもう電話しないでください」とか、以前行っていた中国の医者で一回一万円治療の所に行くと、弟子の人たちに「えりこさんはお母さんが亡くなってお金がもうないみたいだから来させないように冷たくして」と無情なことを言われるのだった。その先生は他の患者さんに、もうお金がなくなりそうな人にはそういうらしいが、この時お金で繋がっていた人たちが去っていくと言う悲しい状況も味わうことになる。

母親が生きていた時に妹の旦那さんが起業したが失敗して数千万の借金があり、えりこの取り分も持っていかれてしまい、えりこには父の遺産がない状態だった。

たとえ遺産の取り分がなくても、肉体的にも精神的にも弱っている自分に優しくしてくれるならいい、と思っていたが妹の振る舞いはクールだった。夫は相変わらず、たまにえりこに会うと「くたばってしまえ。死ね」と暴言を吐く。

生きることに絶望し何回もカミソリを手に掛け、包丁を持ったこともあった。こんな体で家族の支えがないなら死にたいということしかえりこの頭にはなかった。タクシーの中で高いビルを見ると「あそこから飛び降りたら死ねるかな?」と思ったりしていた。その時はえりこはパソコンで文字入力することができなかったが、「手足が効かないと自殺は無理かな?」と思った時に必死でパソコンに向かって「殺し屋」というのを入力し、誰かが殺してくれないかと心の底から思っていた。それほどに生きてるのがつらかったのである。ほっぺたをつねくって夢であってほしいと思って、痛いかどうかは確かめたりしてみた。今現実に生きてる世界が夢であってほしいと思う願望である。夜、寝て明日になれば、目が覚めてなければいいと思うのもしょっちゅうだった。朝になると生きていかなければいけない現実に向き合わなくてはいけなくなる。朝を迎えると絶望の心境だった。

そんな時に一人の心優しいヘルパーさんと知り合うのである。彼女は痛い私の体をさすってくれて、「大丈夫だからね」と夜遅くまで温かい言葉をかけてくれた。

また、えりこが「隣の十四階の団地に連れていって！　死にたい！　突き落として！」と懇願すると、彼女は付き添って十四階まで連れてきてくれた。

そして、「早く飛び降りなさい！！」とおしりをたたかれるのだが、飛び降りる力もないし実際に下を見ると怖くて飛び降りれない。すると彼女はえりこを抱きしめ、「私がいるから一緒に乗り越えていこうよ！　今はどん底でも生きていて絶対に良かったと思える日が来るから！」と。

えりこは彼女の言動に涙が出た。酷い体に絶望し、世間の冷たさに絶望し、死ぬことしか考えなかったえりこの心に、彼女の優しさが灯を灯したのである。

えりこの母は病気の娘を追い払いたいという冷たい人間だったが、彼女は、難病のえりこととともに、戦いを乗り越えていこうとする勇気が伝わってきたのだった。彼女からの無償の愛を感じた。

かすかに見える希望の光にかけてみようと思った。もしかしたら高い治療ではなくて西洋医学でいい薬ができるかもしれない、との望みを持っていた。でも相変わらず酷い体の状態で介護が必要なので情けなく思ったり、そのヘルパーさんがいくら良い人とは言っても、えりこを支える家族にはならないのだから心細かった。彼女が自分を養女にしてくれたら、と切実に願ったこともあるほどである。

そして数年後、あるヘルパーさんから「霞ヶ関に線維筋痛症の専門医たちがいるみたいよ。新聞に載ってたわ」との情報を教えてくれた。えりこはどうせ、いい薬はないん

だから、と行く気はしなかったのだがそのヘルパーさんが「ダメ元で行ってみなさい」と言うので行ってみることにした。

ドクターは「この十一月からリリカという薬が日本で認可をされて使えるようになりました。必ず二ヶ月で良い結果が出ますよ」と希望のある発言をしてくれたのである。

そして二ヶ月後から徐々に結果が現れてきた。半年を過ぎる頃にはこの薬の副作用で十kg太ってしまったが、できることが徐々に増えていった。ドクターが「O先生というのがあなたの近くに教授として行くことになったから、そこの方が通院が楽なので紹介状書くから行きなさい」と言ってその大学病院に行くことが決まった。

最初に先生に会ってみると薬博士という感じで、線維筋痛症のことはもちろん、いろんな分野に精通している優れた知識を持ってる先生だった。

そこで治療していくと痛みがだんだん楽になっていき、気分転換の外出ができるようになり、おしゃれも楽しむようになってきた。

周りのヘルパーさんからも「えりこさんが、こんなに明るい人だと思わなかった。よかったね。良くなって」と言われるようになっていった。

体が軽症時のように自分で髪の毛を洗って、自分で外出できるというわけにはいかないが、自分でやれることが着実に増えていって明るくなり、もう死にたいとは思わない状態になっていった。と同時に体が重症になってから子供のことを考えられなかったことを、本当に申し訳ないと思っていた。昔病気でも愛してくれた彼が「母親が不幸で子供が幸せなんて言う人は世の中に、いないからね」と言ったのを思い出し、えりこが辛かった時、娘もとても辛かったんだということがわかった。

娘の幸せを祈り温かい言葉をかけるようになったら、娘が頻繁に訪ねてきてくれるようになった。その娘も、今は大事にしてくれる彼が見つかって結婚することになった。娘の夫は、人の心の痛みがわかる優しい人なので、本当に良かった。娘が少しわがままを出しても笑って受けてめてくれていて、娘をとても愛してくれる人だ。

まだまだえりこは健康体ではないので、わずかな希望の光に向かって歩んでいる最中だ。辛いことが多かった半生だが、人生は平等だというのを以前に聞いたことがある。下り坂もあれば上り坂もある。そして良いまさかも存在すると信じている。

絶望の時、支えてくれたヘルパーさんも、起業して今はヘルパー会社の社長になり、前のようには頻繁にかかわることはないが心の中でえりこがいつか自立し、仕事や結婚ができればいいと願っていてくれている。彼女はえりこの心の恩人だ。彼女の愛情がなければえりこは命を絶っていたかもしれない。今現在関わってくれているヘルパーさん

やボランティアの人達にも、自分が元気な姿を見せて恩返しをしたいとえりこは思っている。

病気には波があり、腰が痛くてパソコンの前に座れない時もある。マイクを使って声を出して音声認識でメールを打っているが、句読点や誤字を直す時には、やはり腕を使うので首・腕・指が痛くてできない時もある。でもえりこは体の様子を見ながらライターの仕事をたまにしている。クライアントから「期待通りの文章を書いてもらいありがとうございました。依頼して良かったです」と言われると気持ちのテンションが上がり励みになっている。

ただ、痛みに耐え、障害に悩んで暮らしているより、少しでも何かをしたいと言う気持ちがあるからだ。

えりこは料理が好きなので、よくなったら娘夫婦に手料理を振る舞いたいという夢もある。

オリジナルレシピを考えて、ヘルパーさんによく作ってもらって「えりこさんから教えてもらった料理を家族に作ったら好評でした」と言われると少しでも人の役に立てているのかと思い嬉しくなる。絶望で死ぬことばかり考えていた時に比べたらかなりの進歩だ。

あれから数年の歳月が流れた。

ライターのバイトをしていたのはわずか一年くらいである。音声認識で打ち、滑舌が悪いところを直してくれるヘルパーさんが辞めてしまったからである。

でも、いつか自分でできるようになりたいと思っている。

良いまさかに向かって、大変なことも多いが、健康体に近い体になって、デザインやライターの仕事を思いっきりやってみたいとも思っている。

そして、人の心の痛みが分かり、包容力がある優しさを持った人とできるなら結婚したい、とえりこは願っている。

心の中に雨が降る事もある。そんな時、自分を抱きしめてくれた人達や子どもを抱きしめた時の温かい記憶が日差しとなり、心を照らしてくれる。